

作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名：寺田志のぶ 発表者：斉藤麻子（社福 みどりの樹 ループ歩 生活支援員）
 （所属）社福 みどりの樹 ループ歩 堀米美紀（特非 あくしす お好み焼きこなこな管理者）
 役 職 ：管理者

【支援・活動事例の概要】

目標・目的	現状を見つめなおし、課題を浮き彫りにし、自らの言葉で外部に提言する過程を通して、個々の支援の質の向上につなげるとともに、所属法人全体の価値を高める。また、この作業所学会の場が、その提言する場となること。
計画・手段	2名の発表者からのそれぞれの話題提供をもとに、障害のある方の『はたらく』についてその後の全体討議で掘り下げていく。
内容・経過	<p>発表① 斉藤麻子「生活介護事業所ではたらくことの支援をする際の葛藤」</p> <p>Aさんの支援についての葛藤を、事業所の歴史を知ることやはたらくことについて再認識することを通して整理していく過程を発表するとともに、この発表の場で参加者から「はたらくことの支援とはなにか」について意見を聴き、さらに深めていく。</p> <p>発表② 堀米美紀 「A型事業所だからできる はたらくことの支援を考える」</p> <p>全Aネットに参加し、A型事業所としての現状や様々な事業所の意見を聴く機会を持ったことを通して、経営と運営というふたつの異なる目的を持つ「A型事業所」についての葛藤など感じたことについて発表する。発表の場では、事業形態にとらわれず法制度などの変わりゆくものにどうはたらきかけていくのかについて参加者に意見をうかがう。</p>
結果・課題	<p>B型事業所の多い連合会で、あえて生活介護事業所とA型事業所の事例について発表をした。このことを通して、参加者それぞれが自分の置かれている環境、状況と比較しながら、制度の中でどう支援していくかについて考えを深めることができたのではないかと感じた。発表者も、参加者からさまざまな意見を聴き、自身のテーマについて考えを深めることができたとともに、葛藤しているのは自分だけではないと気づくことができた。</p> <p>今回の分科会では、葛藤し続けることに価値があり、葛藤している自分に気付き、どうアクションしていくのか、どう質の向上につなげていくのかが大切であると結論づけた。そして、こういった発表の場、答えを見つける場が必要ではないかと考えた。</p>

【意見交換】

2名の発表の後、参加者から意見を伺った。所属する事業所の事業形態、ご自身のこれまでの経験などにより、多種多様な意見があがった。さまざまな意見がある中でも共通していたことは、みなそれぞれに葛藤していることがあるということ、その中で迷いながらも大切にしたいことを考え、日々の支援に取り組んでいるということではないかと感じた。発表者からは、みなさんの意見を聴いて、葛藤しているのは自分だけではないと知りほっとした、という感想があがった。

【まとめ】

発表者2名の発言について明確な結論に至っていない、ということが今回の分科会のねらいでもある。制度にとらわれずご本人の「はたらく」にどう寄り添うかということ、他方では制度が使いづらいものであるとすればかえていかなければならないのではないかとということ、などが議論の焦点であった。次年度以降もこの分科会が、引き続き発表の場、答えを見つける場となることができればと考える。